

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370174

研究課題名(和文) BODYMIND TOPOGRAPHY～開かれたダイアログ・共有空間の創作研究

研究課題名(英文) BODYMIND TOPOGRAPHY

研究代表者

小山田 徹 (KOYAMADA, TORU)

京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・教授

研究者番号：20580856

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：過度の視覚情報とシンボリックなサインで溢れ、実態のない概念的な空間が広がる現代社会では、人と人、人と環境の関係性の構築が困難になり、コミュニティの喪失や関係不全が起きています。この問題に対して、本研究では、芸術表現に携わる立場から、古代から人々が用いた空間性(洞窟遺跡、宗教遺跡、庭園、茶室等)を「自己定位の為の身体的対話」が潜在的に蓄積し組み込まれた共有空間として捉え、それをヒントに、人と人、人と環境が、実感を伴い、密接に相互関係がはかれる新たな回路、開かれたダイアログを可能にする共有空間を創出する実践的な創造研究である。

研究成果の概要(英文)：In the modern society that overflow by excessive sight information and a symbolic signature where the conceptual space that there is not of the actual situation opens, the construction of a person and a person, a person and the environmental relationship becomes difficult, and the loss and relations imperfection of the community are up. For this problem, I arrest you in this study as the joint ownership space where "physical talks for self normal position" accumulate potentially, and extensity (cave remains, religion remains, garden, tea-ceremony room) which people used from the ancient times was incorporated in by a viewpoint to be engaged in art expression, and a person and a person, a person and environment are practical creation studies to create joint ownership space enabling the new circuit which mutual relations can measure with an actual feeling closely, an open dialogue for a hint in it.

研究分野：美術、社会彫刻

キーワード：共有空間 自己定位 洞窟絵画の空間性 ロマネスク教会 中国庭園 身体的対話 焚き火 茶室

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者の小山田徹は、社会的問題に関わるアーティストとして長年活動してきたが、東日本大震災後、宮城県女川町で、住民融資でスタートした復興連絡協議会とともに、震災によって関係性が分断された場にコミュニティの再生のための共有空間創造を試みた。震災直後には避難所での自然発生的な様々な労働（焚き火、食事、ケアなど）により、人々のコミュニケーションは活発なものがあつたが、仮設住宅への移転に伴い、労働の専門化、居住の分断が始まると、急速にコミュニケーションが不全になり、孤独死や虚脱感などの問題など、コミュニティ自体の運営に支障をきたすようになった。これは、グローバルな経済システムの浸透によって急速に失われるコミュニティ意識の減少と社会的な自己定位喪失による孤独感が発生する現代社会共通の問題であることを見出した。私たちは環境、身体、概念が相関的に関係する中でアイデンティティの獲得や自己定位を行うが、現在起きている物理的、身体的な実感を伴う経験の減少が問題の引き金であることを見出し、これからの共有空間には上記の問題を踏まえた活発なダイアログが起こるための新たな回路の必要を感じた。一方、研究分担者である松井紫朗は、1996年より宇宙開発事業団によって開発された「宇宙環境の尋問社会科学研究の意義と可能性に関わる研究」に関わり、以来、宇宙環境の芸術的利用の可能性にかかわる様々な実験や提案にたずさわってきた。提案の一つ、国際宇宙ステーション日本実験棟きぼうでの「作庭」の実現に向け、「宇宙作庭記-宇宙空間における「庭」の創作研究-」(基盤研究C)、「宇宙における植物庭園実現化に関する造園学的基础研究」(萌芽研究)としてフィジビリティスタディーを行い、2010年3月、「浮遊する庭」を示し、文化的背景の異なる複数の宇宙飛行士による鑑賞会を持った。その結果、逆に、地上での散策のあり方、すなわち、庭園のデザイン、布石、道、橋で制御される身体と自己定位との関係、身体のポジションと知覚の関係性把握の必要性を見出した。2011年よりは「インクルーシブデザインと脳科学～移行の矯正デザイン感性論」(基盤研究C)を開始し、庭園や建築の設えによってもたらされる所作、身体感覚の入力が、奥行き感覚やスケール感、距離の把握など、知覚や自己定位の獲得に影響を与え、という確信を得た。研究代表者の小山田は、11年前から洞窟探検を定期的に行っており、教会建築と、暗黒の息詰まるような狭小空間を抜けた後の見上げるような大空間で得られる感覚との共通性について考えていたが、この松井の実験結果を踏まえ、現代社会の問題解決に向けて求められる、開かれたダイアログが可能な新たな共有空間の設計には、古来より用いられてきた岸城空間や遺跡を、「自己定位の為の身体的対話」が潜在的に蓄

積され組み込まれていた共有空間として捉え、そこから抽出されるエッセンスを現代に活用することが有効であると、本研究の着想に至った。

### 2. 研究の目的

現代社会は、テクノロジーの発達による移動、情報伝達手段が便利になる一方で、身体的な関係性の減少と、その経験による自己定位能力の低下により、環境や他者、様々なものとの関係性構築が困難となり、コミュニティの喪失や関係不全が起きている。この問題に対し、本研究は、芸術表現に携わる立場から、洞窟遺跡や宗教遺跡、庭園、茶室など、過去よりもちいられてきて空間を、「自己定位の為の身体的対話」が潜在的に蓄積され組み込まれた共有空間と捉え、それをヒントに、人と人、人と環境が、実感を伴い、密接に相互関係がはかれる新たな回路、開かれたダイアログを可能にする共有空間-Bodymind Topography-を創出する実験的な創作研究である。

### 3. 研究の方法

初年度は、蘇州杭州の中国庭園、フランス・ドルトーニュ周辺の洞窟群、ロマネスク教会のリサーチ、カンボジアアンコール遺跡のリサーチ、中国山水画等のリサーチで、その空間の形状によって制御される身体の動きと体性感覚が、社会的、文化的制度と結びつき、どのように「自己定位の為の身体的対話」として機能したかについて、「環境的視座」「空間的視座」「概念的視座」から分析し、エッセンスとして抽出する。

次年度は、抽出された「自己定位の為の身体的対話」から開かれたダイアログを可能にする共有空間「Bodymind Topography」創出を念頭に、現代に活用される要素を構築する。最終年度は、前年度で得られた知見を元に、「自己定位のための身体的対話」を実践的に創出し、運用、活用を試み検証する。

### 4. 研究成果

#### 「リサーチによる知見」

蘇州杭州の中国庭園、フランス・ドルトーニュ周辺の洞窟群、ロマネスク教会、カンボジアアンコール遺跡のリサーチ、中国山水画等のリサーチにより得られた知見を以下に述べる。

一つに、空間体験導入における身体運動的負荷の存在。中国庭園では、ジグザグの濠の橋を渡るところから始まり、折れ曲がる狭い通路や上下移動、方向転換、くぐり抜け等が自然と強いられ、方向感覚と位置把握の幻惑が起こるように設定されている。洞窟空間においては言うまでもなく、狭窄部の通過に伴う身体的圧迫や激しい上がり下がり、移動中の手や足の多用、迷路状の分岐における位置喪失、圧迫感、見下ろしや見上げの必要な空間性、身体と空間の接触による痛みなど、身

体的負荷には事欠かない。ロマネスクの教会も、初期のものに顕著だが、洞窟空間との相似が見受けられ、分厚い石の壁の小さな入り口の通過や水盤の見下ろしや柱や天井への見上げる動作の誘導、接触の石の質感、迷路的回廊状小空間と大空間との織りなす迷宮的体験がある。

二つ目に、明暗の存在。これも身体的負荷に属する事であるが、重要な要素なので分けて知見とする。洞窟空間は入り口から内部への移行で完全に別世界へ移動する。明るい太陽光世界から宇宙の暗黒へ。その移行だけで、位置喪失感は一気に起こる。又、松明やヘッドランプによる照明は、自分が移動すると光源が移動し、洞窟空間の陰影が激しく変化し幻惑と幻想体験を誘発しやすい。イメージの創造にこの環境がおおきく関与した事は創造に難くない。特に松明等の炎は揺らぎや陰影の変化、光度不足など身体への負荷が重く、より空間体験の震度がはかられる。ロマネスクの教会も極小の窓により象徴的な空間性と影の動きの演出がなされており、この面でも洞窟空間との親和性が確認される。中国庭園では暗黒空間はないが、迷路状、入れ子状に配置された部屋とそれをつなぐ通路が様々な度合いの明暗を有しており、装飾された窓格子による様々な光と影の効果や木々の木漏れ日の揺らぎ、素面の波光やその照り返し、鏡やニス塗りの壁面の反射や土壁の陰影など多種多様な光の状態が組み込まれ配置されており、その効果は大きい。

三つ目に奥行き感覚の操作の存在。洞窟空間においては、光源により作り出される陰影により、実際の洞窟壁面がより立体的に強調され、距離感や奥行き感覚が惑わされる。特に洞窟壁画が描かれた壁面が凸面や凹面が多く選ばれている事が興味深い。面の向こう側に誘われる視線によって不思議な奥行き感覚が立ち上がる。又、ロマネスク教会等の大空間を支える柱群は天と地を結び、視線を上下方向に誘う。特に見上げるという所作は奥行き感覚の幻惑を誘う。中国庭園の連続する空間と外部をつなぐ窓や出入り口は向こうの世界の切り取りが行われ、単一空間の中に奥行きを作り出す。入れ子的空間のこの効果はアンコール遺跡群でも顕著であった。

四つ目にスケール感の喪失の存在。大洞窟空間では暗闇による空間把握の困難さと音空間の特殊性からスケールアウトしがちである。又、移動中の狭小空間の壁面の近さや洞窟絵画を書いた時の姿勢等などから、目に迫る壁面との関係はスケールアウトが起こりやすいと推測される。又、中国庭園に配置された絵画や彫刻、奇岩、盆栽等は様々な概念的スケールアウトを誘う。

「共有空間の為の要素の抽出と実践的実験」

上記の知見を元に、現代の我々の生活の中で存在している要素を検証してみた。

一つ目は、日本の茶室の空間性。茶室は待

合から庭、飛び石、中潜り、にじり口、床、狭さや明暗、など様々な知見と類似の要素が恐縮し、構成され、作法としての身体性も作られている非常に興味深い空間である。研究分担者の松井紫朗を中心に茶室の調査、政策を行い、その過程で、「自己定位のための身体的対話」の機能を探る事にした。数多くの茶席を見学リサーチし(幸い京都には多くの有名茶室がある)縁あって、表千家の「不審庵」の詳細な見学がゆるされ、「不審庵写し」を大学内に建築することにした。研究室の中に茶室空間を同寸で再現し、空間性の工夫の理解を試みた。座った時の視線を意識した壁の切り替えや窓切り、複数の人が入った時の絶妙な近さ、光の効果、所作に伴う音の効果、床の存在理由、象徴的な文物の存在。茶の味。制作する過程で、先人たちの感覚の鋭さと空間決定の的確さを痛感することとなった。



二つ目の要素の検証は「焚き火」の効果である。代表研究者である小山田徹は以前から焚き火と共有空間の関係性をテーマに活動を行ってきた。焚き火は人が集まる場所としての場としては、世界最古、世界最小、世界最強の共有空間であると思われ、焚き火の魅力について、本研究の知見に照らし合わせて検証してみると、光の揺らぎ効果、匂い、闇と光、距離感、労働的身体性、会話の拡散、集中、中心性と拡散、場の遠望からの認識、料理等の拡張、温度、イメージーションの誘発、など興味深い共通点が挙げられる。考えてみれば、様々な儀式空間、遺跡等の場ではそれらに先行して「火」の存在があったことは疑いがなく、それが作り出す効果に人類は早くから捕らわれ、利用してきたのだろう。Bodymind Topographyの創出にこれを使わない手はない。震災を機に関与している宮城県女川町で、迎え火、送り火としての小さな焚き火の企画「女川常夜灯プロジェクト」を行った。又、研究者の属する京都市立芸術大学でも、様々な機会に焚き火場を使う企画を試みた。

「実践的な共有空間の試み」

上記の思考を考慮して実践的な共有空間の試みである「Weekend Café Project」を開催した。京都駅の東側の空き地で、3ヶ月に渡り、2週間に一回、土曜日の昼から夜まで、テントと焚き火のある空間を創出した。可能



な限り簡単な営業で、人々が自由に飲食し語り合える場所をつくりだした。場所が街中ということもあり、ランドマーク的に目立つテントも相まって多くの人々が参加し、自律的に労働がシェアされ、対話の場としてはとても面白い、有効な場として運営された。計2800名を超える方々が参加した。このような場が社会にどのように必要とされ、どのように問題を解決していくのかまだ未知の部分も多いが、今後も検証を重ね、開かれたダイアログが可能な場の創出を目指していく所存である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
 発明者：  
 権利者：  
 種類：  
 番号：  
 出願年月日：  
 国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
 発明者：  
 権利者：  
 種類：  
 番号：  
 取得年月日：  
 国内外の別：

〔その他〕  
 ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

小山田徹 (KOYAMADA TORU)

京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・教授

研究者番号：20580856

##### (2) 研究分担者

松井紫朗 (MATSUI SHIRO)

京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・教授

研究者番号：60275188

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

( )